

五十音圖の  
由来

一三三 五十音圖といろは歌

一三三 五十音圖といろは歌

一三一

一 五十音圖

五十音圖の  
由來

五十音圖は我が國に於て案出せられたものであるか或は他國よりの影響によつて成立したものであるかに就いては古來より説があつた例へば

我が國固有  
説

「今日の五十字は梵字悉曇の意に似たり。故に諸家の註釋に皆元悉曇より出たる由いへり。然れども信じ難き事なり。」(釋文雄(和)字大觀抄)

「吉備公音韻の學に長せられしをもて和語を勘辨し、五十音と定められしと見わたる。」(倭訓栞)

「五十音が悉曇の字母に似たるは我より彼を寫したるにあらず、元より皇國のものなるが彼より我に似たるなり。」(中略)此の如く正音なるにより太古より誰が云ふともなく自然に傳はりたるなるが、文字を以て事を記す世となりての後に次第で見れば、此五十連音圖とはなるなり。」(鈴木重胤(詞の捷徑))

悉曇源流記

「然れば悉曇の摩多體文と五十連音とは本末の異にて全く本邦にて悉曇を學べるものの作りし事明けし。」(釋春登(五)十音摘要)

五十音圖は  
吉備真備の  
作でない

五十音圖は  
列の順序

「此五十音を我國に神代よりありこし物のやうにいふ人あるは心得ず。さる事何の書に出たるか、いぶかしき事也。東滿の記されしものに其の家に古き傳の有りしといはれしは、さもありつらめど、いかでか上つ代よりの傳なるべき。」(中略)今考ふるに我國に此五十音ある事は、むかし音博士などの唐より傳へしものと思はる。」(村田春海「五  
十音辨誤」)

「此音圖は漢籍佛書を讀む者の爲に悉曇字母に併せて製りたるものなれど、さすがに音韻を熟く識得たる人の所爲にて、云々」(關政方「聲調篇」)

「我國往古より傳ふる五十音排列は悉曇につきて此分にて製したりと云説をよしとす」(烏海恭仲「音韻啓蒙」)

等の如く印度の悉曇に起源せるものなりとの二派に分つことが出来る併しなから近頃の研究に従へば五十音圖の悉曇に起源せるものなることは最早や決定的事實として學者間に認められて居る所である。片假名と共に五十音圖の製作を吉備真備一人に歸するが如き一派の論は、殆んど採るに足らぬのである。

今日の五十音圖は假名を以て書かれ聲位はアイウエオ横位はアカサタナハ

ヤラワの順になつて居るが、古くは片假名のみならず漢字を以ても書かれ、其の順序も、豎位にはアウイオエ、アエオウイ、イオアエウ、横位にはアカサタハマヤマナフアエヤサタナラハマワ、アカタラサハナリマヤ、アハタカサラナリヤマ其の他各種の形式があつたのである。

おを所屬論

五十音圖の豎横の順序は斯の如く時代によつて相違があつたが、茲に一つ注意せねばならぬことは、「お」と「を」の所屬問題である。彼の寶曆明和(朝野英祖の頃)の頃に出版せられた「和字大觀抄」(續文)「語意考」(如茂)等の書に記せる豎横排列の順序の如き今日の順序と畧同一であるが、唯「お」と「を」の置場所が違つて居る。即ち此等の書に於ては從來流布の音圖に誤られて「お」をわ行に、「を」をあ行に編入して居るのである。元來「お」のあ行に、「を」のわ行に屬すべきものなることは、其の假名の字源より、又國語に於ける所謂通音の現象より見て容易に推測し得らるべき事柄であつたに拘らず、此等非凡なる國學者を以てして尙ほ之を覺り得なかつたといふことは、寧ろ不思議に思はれる位である。而して此の誤謬を發見して國語學界に偉大なる功績を残したのは、實に本居宣長で、其の著「字音假字用格」に於て之

に對する數箇條の證左を擧げて居る。其の後に至り東條義門が「於乎輕重義」を著はし、宣長の説を布行してより、此の説はもはや動かすべからざる事實として承認せらるゝに至つた。

又「あ」「や」兩行中にある「イ」と「エ」の別は、漢字を以て記せるものには三十六字母中の影、喻、兩字母の文字を以て書き別けたものもあるが、片假名を以てせるものでは其の區別を設けず、又「あ」「わ」兩行中にある「エ」「エ」は或は之を區別し、或は之を混用した例が少くない。

## 二 いろは歌

いろは歌は平假名の製作と共に古來僧空海の作なるが如く傳へられて居る。伴信友の如きも假字本末に於て其の説を主張して居る。併しながら其の説の誤れることは始めて此の歌の記載せられて居る「金光明最勝王經音義」が承暦三年（西記一〇七九年）に出來上り、空海在世を距る二百餘年後なる一事に徴しても略々推知することが出來よう。近頃大矢透氏は「音圖及手習詞歌考」を著はし、其の中に於ていろは歌の空海の作にあらざる所以を詳論せられて居るから詳細を知らんと

する人は是非該書を一讀せられたい。

いろは歌は四十七字より成り、涅槃經の「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」なる四句の意を寓したものといはれて居る。即ち其の意義をいへば

色は勾へど散りぬるを　　我が世誰ぞ常ならむ

有爲の奥山今日越わて　　淺き夢見し酔ひもせず

となる。但し「いろは」の「は」は一説には助詞の「は」どなし、他の説には「葉」の意義であるといひ、又「あさきゆめみし」の「し」は或る人け「爲」の意義であるといひ、或る人は打消の「じ」であると論じて居る。

いろは歌の全體の調子は七五字四句から出來上つて居るから、本來は四十八字でなければならぬ。然るに其の第二句が六五字になつて居るので全體が四十七字の端數をなして居る。いろは歌の以前には之と同性質のものにして天地の歌なるものがあり、初等教育上に使用せられたものであるが、これは四十八字ある。畢竟兩者の相違の分るゝ点は、天地の歌が「わ」とや行の「わ」とを區別したるに反し、いろは歌が兩者の區別を失ひ、單にや行の「わ」のみを採用したのに起因

いろは歌の  
意義

天地の歌は  
四十八字で  
いろは歌は  
四十七字な  
る理由

いろは歌の  
體格まで行  
かれた理由

するのである。

同音を含まざるいろは式の教訓的歌詞は、其の後人々により試作せられたことがあるけれども、何れも永い生命を保持することが出来なかつた。これ畢竟いろは歌が他の歌詞に比較して口誦に便なると、行文の輕妙なるとに由るものであらう。